

# 佑 啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学会  
〒290-02 千葉県市原市今富1110-1  
☎0436-36-7611 FAX 0436-36-7612  
発行者 星 見 吉 英  
編集者 三 股 金 利

## 時の「ま」

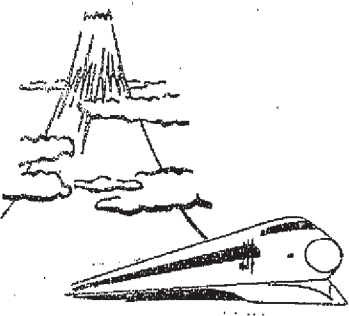
古川 弘

新幹線は、開業以来、列車のスピードをアップしている。時刻表によると東京・大阪間「のぞみ」で二時間三十分、コワイ程の高速振りを示す。恐ろしいと云えば、乗車中、もし突然の事故が発生すれば大惨事となるだろうと云うことである。でも、あれだけの過密ダイヤにかかわらず人は殺到する。しかも、このスピードに馴れてしまうと、つい「こだま」より「のぞみ」という御仁が増える。そして、節約された時間の合理化で、仕事が進められる。業務の合理化と「多忙」という名の集積とも考えられる。一方、私的旅行だと、観光先を盛り沢山に増やすなど、レジャーの多様化が進展する。云いかえると「時を要う」ことを意味する。

因みに、東京・大阪間に特急「つばめ」号が走ったのは、一九三〇年（昭和五年）十月である。所要時間八時間二十分、その頃では夢のようなスピードの客である。父に連れられて乗った記憶がふと想いだされる。乗りものの好きの少年の夢は、今も車窓から眺める富士山に象徴される。

れず、運動会のパン食いレースで甘んじている。日常生活では、身辺処理に苦勞している人達もいる。援助者は、自主性を助長する意味合いでポイントに手を添える程度に心がける。つまり時間をかけることとなる。食事・入浴・着脱衣・排泄など生活のルールと共に、人と人との生活のふれあいが際限なくひろがってゆく。云いかえれば、常識的な時間の処理は無に近い。これにくらべて、一般社会では、時を計画的に活用する。仕事に追われる人は遊ばない。動じすぎる人は夜の睡眠を制愛する。多くの善男善女がパソコンに左右されつつある。通勤ラッシュに臨まず巷を突進している。なぜ、こんなに急ぐのかである。

再び障害をもつ方達のこと。以上を要約すると、障害者の一日は別格であると考えた。援助する側の立場からは、指導処遇上タテ割りの強制や押しつけが過去のものとなったことは喜ばしい。しかし未だ、社会事情のなかでは、人権擁護問題が粗上りのばかり、その姿勢を問われることもあるのでは？そこで、障害を持つ方達のおつきあひについて、極めて些細な日常的なことを提案することとしたい。家族や施設職員および周囲で関係する支援者の方で「待つ」姿勢をとること、優しく待つてあげることを提案したい。集団生活の場合、許容される時間に限度もある。このあたりは日頃の研究と協議が必要である。その構えのひとつが、この方達の一日は三十六



( 佑啓会 理事長 )

時間という厚意の思いやりを胸にほしと思う。  
私は、以前から何とはなしに培った言葉がある。「あせらず（焦）おこらず（怒）ひく（退）」の三語。昔から先輩づらして後輩に説教して失礼しているが、よくよく考えれば、知的障害を持つ方達が私にプレセントしてくれた思いがする。この三つの姿勢の裏には、それぞれ、準備、その進め方、そしてまとめ方に至る時間のながれと余裕が生まれることを意味している。特に「ひく」は、実質、三歩進んで二歩さがする場合もあり、人生のあやというものかも知れない。

## ドイツでビール イタリアでワイン

長良 幸男

「日本からの派遣団 ANFFAS 訪問」日本から要をこめて ANFFAS（福祉事業グループ）に属する Maddarena 施設に参り、この日はめつたにない日であった。日本の知的障害者更生施設で働く代表者で構成されたヨーロッパ研修中の日本人を乗せたバスが屋敷に到着。Bruno Cinesse 会長と施設の仲間たちを迎えられた。

これは、愛護協会による海外障害福祉事情視察でイタリアを訪問した際、地元の記事として取り上げられたものである。今回チャンスを頂き、ドイツとイタリアを訪問した。福祉先進国といわれる北欧諸国と違い、日本での情報は極めて少ない。それだけに多くの興味がわかれた。

最初の訪問国ドイツでは他のヨーロッパ諸国同様、大規模施設から小人数の施設へと移行してきており、早期療育・統合教育が数多く実践されていた。そして国民気質ともいえる几帳面さが、施設見学で随所にみられた。また、ナチの大衆虐殺の時に知的障害者が相当含まれていたため、皮肉なことに現在の時点では、高齢化は問題になっていないという。

一方イタリアでは、福祉施設設立に対する法的な規制が少ないこと、公的資金のバックアップも少ないことから、施設の建物は元会社員寮であったりと、設備面での整備は立ち遅れの感が強い。ただ、人的確保の一環として兵役義務が社会奉仕という形で免除されるため、そうした人々の施設で働く姿が目立った。また、資金調達については福祉宝クジなるものを発売し、その売上を福祉施設に分配するという、ユニークな発想に驚かされた。義務教育制度では特殊学級が廃止され、普通学級に障害者専任の職員が別に配置されていたが、これも統合教育の一つの表れだった。

文化や経済状態、また時代背景の違いがあり、知的障害者福祉を単独に国単位で比較することは危険ではあるが、日本の福祉の遅れを感じさせる場面に出合うことはなかった。それよりも歴史の中で積み上げてきた、独自のシステムや工夫・方法論が印象に残る。日本を立つ前の様々な不安が消えていったのは、気がおけないメンバーとの出会い、温かい出迎え、そしていつも食卓に上るワインによるものだったことを最後に付け加えておきたい。

( 愛護係長 )

流氷の漂着で有名な北海道・網走近郊の紋別。花や温暖な気候で有名な房総。私たちはまず、日本の「長さ」を再認識させられ、二週間の住み込みボランティア生活に入りました。

私達が、ボランティアをしようと思ったきっかけは、社会福祉施設に就職を希望しているため、施設というものがどういった所なのか、本当に職員として勤まるのかどうかを確かめたいという思いからでした。

しかし、決意はしたものの、どこにどのような施設があるか全くわからなかった為東京周辺の知的障害者施設の電話番号を調べ、最初に電話した所がふる里学舎でした。これが今回、二週間ふる里学舎にお世話となる始まりでした。こんな施設の選び方をして大変失礼ですが、結果的に良かったです。

さて、ふる里学舎に来て、まず感じたことは、ここにくるまでの私達の描いていた施設像とは異なり、施設長をはじめ職員全体が若く、職員も寮生さんとても明るい雰囲気があることでした。また、寮生さんを指導職員のみが関わるのではなく、厨房などで働く他のスタッフが共に連携して見守っているということが印象的でした。

私達の主なボランティアとしての内容は朝の食事から始まり、昼間の作業では一緒に汗をかき、夜は寮生さんと楽しく雑談などで時間を過ごし、お風呂にも一緒に入りました。特に、林産科での菌打ち作業はとても疲れる作業でしたが、寮生さんの懸命に作業をしている姿を見ているとやる気が増し、作業が終了すると、皆でやり遂げたんだという気持ちで精神的にとっても充実した日々でした。



## はるばる北海道から来てみたら



道都大学 三回生  
神澤 礼志  
坂井 均

と、ここまではボランティア本来のお話をさせていただきましたがちょっと脱線。二週間の間に「社会勉強」もばっちりさせていただきました。

十二月十五日、勤務明けの職員さんに引率して頂き、初めていった東京ディズニーランド。皆さんは寒そうにしていたようにでしたが、私たちははしゃぎまわっていました。体を寄せ合うカップルを尻目に、男二人で場内全てのアトラクションを体験してきました。十二月十日の地域の方々と寮生さんの忘年会、最終日にお招きいただいた職員忘年会では「酒」の飲み方、飲まれ方を学びました。

ボランティア活動最終日、寮生さんに、「寂しくなるね。また来て下さいね。」と言われ、この時ばかりは泣きたいほど嬉しくてここに来て本当によかったと思えました。私が声を掛けるとニコッと微笑んでくれ、私に「頑張ろうね。」と言ってくれた時の彼の笑顔は一生忘れません。

大学では福祉を勉強していますが、今回実際に福祉の現場で働いてみて、改めて福祉という仕事に従事することの難しさを痛感しました。しかし逆に、福祉という仕事の楽しさや充実感も分かったような気がします。今回の経験を素直に受け止め、今後の大学生活や社会に出て働く時にも何らかのかたちで活かして行こうと思います。

ふる里学舎の寮生・職員の皆様、本当にありがとうございました。

## 鳥になつた僕

東瀬戸 徹

「勘弁、こんな所から飛び降りるの」四年前のゴールデンウィークに、パラグライダーの一日体験のコースで初めてデイク・オフ(離陸)する時の気持ちです。

今になって思えば、何のことはない落差5、6m程のちよつとした丘から駆け降りて、距離にして50m程の飛行です。しかし、その日初めてグライダーに触れ、各部の名称、キャノピー(翼)の広げ方・収納、操作の仕方の説明を受け、そして一時間弱のグライダーの立ち上げ練習後すぐのことです。その場所が随分高く感じられました。この飛び立つまでのドキドキとは裏腹に、実際に足が地面から離れ、風を受けながら、斜面の木々を見下ろし浮遊している気分は何とも言えません。操縦なんてまだ分からず、インストラクターの掛け声に従い左右の手を上げ下げしているだけで、この時私は機械の力を頼らず自由に空を飛ぶことができたというパラグライダーの魅力に取り憑かれたのです。

こうなつてしまつたらもうじつとしてはいられません。P証(日本ハンググライダー連盟が制定した技能証)を取つて日本中の空を飛び歩くという夢を抱いて、月に一度、長野のスキークラウドにあるスクール通いを始めたのです。

三度目くらいに行つた時に、デイク・オフ地点からランディング(着地)地点までの高度差100mのフライトをしました。P証を取るための検定を受けるには、この程度のフライトを60本、もしくは五時間の飛行時間が必要で、す。しかし、月に一回くらいでは、天候が悪いと飛べないし、飛べたとしてもひと月も間が空いていると感覚を忘れていて、思い出した頃に足は痛む時間です。詰めて通わないとなかなか上達しません。

デイク・オフ地点とランディング地点の高度差500mの山頂からのフライトを体験できたのは、一年半程してからのことです。確かに高くて怖いのですが、米粒くらいにしか見えないスキーヤーや回り一面真っ白な雪景色を見下ろしながらのフライトは最高、寒さも忘れてしまします。

空を飛ぶスポーツ、当然危険も伴います。パラグライダーの事故のニュースも最近よく耳にすることがあります。私も一度山沈(森に落ちたり木に引っ掛かったりすること)を経験しています。山の斜面に立つ木の高さ10mく

らしい所に引っ掛かってしまったのです。二時間程、真冬の雪の降る中で宙吊りになっていました。

だからという訳ではないのですが、最近足が凍のいています。

学舎に来て一年、この仕事を始めたばかりで今の時期は仕事に全力投球。何でもそうですがやり始めにどれだけ集中できるかでその後の伸びが左右されます。

「日本中の空を飛びたい。」という夢をあきらめた訳ではありませんが、今は一休み。学舎に来た当初の気持ちを忘れず、与えられたことはもちろん、それだけではなく色々なことを吸収していきたいと思っています。

## 歳 標で初日の出

新年明けましておめでとうございます。

本年、私は千歳の年女です。思えば十二年前の一月一日、私はまだ小学校五年生でした。身体は子供でも立派な考えを持っていたつもりでいました。がしよせん十一才は十一才、ひどい反抗期で親を悩ませていた真つ最中だったと思います。

十二年の間に中学・高校・専門学校を卒業し、ふる里学舎に勤め三年目となりました。節々で色々な変化のあった、長いようで短い十二年だった気がします。

年女暮開けの一月一日、私は三名の寮生さん、グループホームに入居している方達、短期入所の方達と、白子の城之内荘でゆつたりとしたお正月を過ごしています。展望大浴場からは、初日の出も拝みました。

朝焼けの太平洋からゆつくりと顔を出し昇つていった今年最初のお日様。

私に大きな変化・節目を予感させてくれる、そんな年始めとなりました。

さあ、今年も頑張りました。

平成八年 元旦 白子にて

南雲 美子

本年も「佑啓」のご愛読

よろしくお願ひいたします